45）腹部外傷の診断と治療
—100例の臨床経験から—

島影　尚弘・篠永　真弓
神谷岳太郎・新田　幸壽　（長岡赤十字病院外科）
田島　健三・和田　寛治

過去8年間に当科で経験した腹部外傷100例について，その診断と治療の面から検討した．緊急の場合，腹部外傷の診断に際しては的確な問診・視診・聴診・触診を行い，腹部単純写真，血液・尿検査程度で早急に手術適応を決定する．手術適応の大きな要因は出血であり，ショックや進行する貧血の場合は比較的容易であるが，やはり診断の主眼は腹部触診所見の時間的変化であり，腹部単純写真・検査データで補足すべきである．

46）開心術後における腹部手術例の検討

大溪　秀夫　（立川綜合病院外科）
坂下　　勲　（同 胸部外科）
伊賀　芳朗・内田　克之
岡村　直孝・遠藤　和彦
西巻　　正・白井　良夫　（新潟大学第一外科）
酒井　靖夫・津野　吉裕
佐々木公一

当科で過去3年6カ月で経験した開心術後における手術症例は18例で，同時期の心機能障害例70例の25.7%である．開心術の内訳は CABG 7例，MVR 5例，ASD 3例，DVR 1例，OMC 1例，LVaneurysma 1例であり，原疾患としては，胃癌，胆石などの全身麻酔症例が12例，急性虫垂炎などの腰椎麻酔症例6例であった．また，緊急手術は6例であった．術前心機能標価として，心エコー，心筋シンチ検査などを行い，症例によっては，呼吸循環動態の監視にレスピレーター，Swan・Ganz カテーテルを用いた．抗凝固療法中の症例は抗凝固剤の投与を中止し，TTO 40%以上を目標として手術を行い，緊急手術に対しては vit K，FFP などを投与してから手術を施行した．術後合併症は左心不全1例，脳血栓1例を経験したが，手術直接死亡はなく，死亡例は胃癌（CABG）再発の1例であった．

第13回リバーカンファレンス総会

日　時　昭和62年10月9日（金）
午後3時～7時
会　場　新潟東映ホテル

一　般　演　題

1）肝内門脈肝静脈シャントを伴った Nodular Regenerative Hyperplasia の1例

森山　裕之・月岡　　恵
佐藤　　明・何　　汝朝　（新潟市民病院消化器科）
市井吉三郎
野本　　実　（新潟大学第三内科）

症例は65才女性．昭和61年5月より異常行動，意識障害がみられるようになり当院受診，高アンモニア血症を指摘され精査のため入院．GOT23U，GPT16U，NH_3 318 μ/dl，Fischer 比1.7，ICG_{R15} 25.5%，腹部エコー，CT では肝右葉に血管の拡張を疑わせる所見がみられた．血管造影では肝内動脈枝に屈曲蛇行を，経皮的門脈造影では左内側区域枝，右前区域枝に拡張がみられ，右肝静脈への PVshunt を認めた．門脈圧は 243mmH_2O であった．腹腔鏡下針生検を施行，線維化を伴わない結節性過形成巣がびまん性に認められ NRH に類似する組織像を呈してした．PVshunt，NRH の成因は不明であるが，NRH による門脈圧亢進が shunt を増大させたものと考える．

2）血管造影上診断が困難であった肝腫瘤性病変の4例

中沢　俊郎・塚田　芳久
村山　久夫　（信楽園病院内科）
大村　康夫・清水　武昭（　同　　外科）

近年，血管造影を中心とした各種画像診断法の進歩により，肝内腫瘤性病変の診断率の向上が目ざましい．

今回，血管造影所見が非典型像を呈し，診断困難であった4例を経験し，超音波，CT 等の組合せにおいて，血管造影所見を最終決定因子とする診断方針には限界があると思われた．

今後，症例を重ねることにより，個々の症例における各画像所見の信頼性，優先性をめぐりさらに検討を進めることでこれら非典型例に対し，診断にひとつの方向性を示唆しうる可能性もあると思われた．